

【参考辞書】

大野晋編（2011）『古典基礎語辞典』角川学芸出版
中村幸彦，岡見正雄，阪倉篤義編（1999）『角川古語大辞典』第5巻 角川書店
日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第2版（2000）小学館
室町時代語辞典編修委員会（2001）『時代別国語大辞典』室町時代編五 三省堂

【参考文献】

磯部佳宏（2012）『『とはずがたり』における動詞「聞く」の意味用法』『山口大学文学会誌』62
入江さやか（2013）『『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法』『同志社国文学』第78号
次田香澄（1987）『とはずがたり（上）（下）全訳注』講談社学術文庫
辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【自立語篇】笠間索引叢刊99 笠間書院
福田秀一校注（1978）『とはずがたり』新潮日本古典集成 新潮社

〔付記〕 本稿は2010～12年度科学研究費補助金による基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」（研究代表者 石井久雄，研究課題番号 JSPS 22520478）の成果の一部である。

申すばかりなし。(I 216.02)

「申す」において、②《形式的用法》と③《連語》に現れた意味・用法は、すべて、「言ふ」にも見られたが、「申す」は「言ふ」よりも、用例数、意味・用法の種類が、少ない。

4. まとめ

以上、『とはずがたり』における「申す」354例の意味・用法について、「言ふ」と比較しながら述べた。本稿で明らかになったことを以下にまとめる。

- (1) 活用形による分類で、「申す」のほうが「言ふ」よりも多く見られたのは、連用形、未然形、命令形である。
- (2) 「申す」は具体的な動作を表す①《具体的用法》が全用例の約8割を占め、動作性の弱まった②《形式的用法》は2割弱に過ぎない。「言ふ」の②《形式的用法》は全用例の4割強である。
- (3) 「申す」は、「言ふ」では見られない①《具体的用例》として、(b)その他の行為、すなわち、「所望する」、「為す」、「酒を勧める」などの用法がある。ただし、その用例数は、(a)発言行為と比べると、1対5で少なく、「申す」の動作性としては、発言行為が主である。

本稿では、地の文、会話文という観点からの分析、「申す」の待遇性について、触れられなかった。今後、それらについても考察し、また、「聞こゆ」「奏す」も調査対象とし、「言ふ」「申す」「聞こゆ」「奏す」の違いを、意味・用法別の用例数から述べるつもりである。

注

- ① 38例の内訳は次の通りである。「申し置く」8例、「申し入る」5例、「申し遣る」3例、「申し合はす」「申し出づ」「申し承る」「申し伝ふ」2例ずつ、「申し合ふ」「申し表す」「申し出だす」「申し受く」「申し叶ふ」「申し通はす」「申し通ふ」「申しことづく」「申し定む」「申し知らす」「申し尽くす」「申し続く」「申しなす」「申し紛らかす」1例ずつ、異なり語数21、延べ語数38である。
- ② このうち、10例は、「言はむかたなし」の「む」である。
- ③ 「物を言ふ」は4例見られた。

【調査資料】

久保田淳校注・訳 (1999)『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』小学館

事なり。御悩みわづらはしくて、ほど経たまひける御祈りに(Ⅲ352.04)

③7は、福田(1978)の頭注に、「ここは初め『今御所御悩み……』と書きかけて、「今御所」に説明を加えたため、文脈が屈折したものだ。」とある。このような例は、「言ふ」にも2例見られる。久保田(1999)『新編』の頭注では、「『そのころ今御所、御悩みわづらはしくて』と続くべきところに、説明のために『と申すは…の御事なり』が入り込んだ文脈」とある。

②⑧は、助詞「と」で受けて、世間で人々が言っていることを伝聞した、あるいは、間接的に他人から聞いたこととして、ある事柄を取り上げることが示す。この用法は11例である。

③8 水無月のころにや、法皇御悩みと聞こゆ。御瘡心地など申せば、人知れず、今や落ちさせおはしましぬとうけたまはると思ふほどに(V501.11)

②⑨は、「…と申せども」「…と申すとも」「…と申すも」「…と申しながら」の形で、「確かに…であるがしかし…」「…だが、しかし…」などの意味で、接続詞的に用いられる。それぞれ1例ずつ、計4例見られる。

③9 さて、君を打ちまらするほどのことは、女房なりと申すとも、罪科軽かるまじきことにさぶらふ。(Ⅱ286.06)

②⑩は、「…と申し、…と申し」の形で、二つ以上の事柄を例示して、そのどれもという意味を表す。この用例は40のみであるが、「申す」ごとに数えているので2例となる。

④0 故典侍大と申し、雅忠と申し、心ざし深くさぶらひし(Ⅰ266.07)

3.2.4 ③《連語》

連語として扱った用例は、③④「申すに及ばず」3例、③⑤「申すにや及ぶ」1例、③⑥「申すばかりなし」1例、合計5例である。「申すに及ばず」「申すばかりなし」は、『日本国語大辞典』第二版、『角川古語大辞典』には記述がなく、『時代別国語大辞典室町時代編』では、「『言ふに及ばず』の改まった言い方。」「『言ふばかりなし』の改まった言い方。」との説明がある。

④1 太政大臣の女にて薄衣は定まれることに候ふうへ、家々面々に、我も我もと申し候へども、花山・閑院、ともに淡海公の末より、次々また申すに及ばず候ふ。(Ⅰ276.14)

④2 將軍にて下りたまひしかども、ただ人にてはおはしまさで、中務の親王と申しはべりしぞかし。その御跡なれば、申すにや及ぶ(Ⅳ439.02)

④3 「六波羅の南方、式部大輔討たれにけり。その跡の煙なり」と申す。あへなさ

る用法。

㊸ 「…と申し、…と申し」の形で、二つ以上の事柄を例示して、そのどれもという意味を表す用法。

以下は、「言ふ」のみに見られる用法である。

㊹ 「…ともいはず」の形で、「…であるにも関わらず」の意味を表す。

㊺ 「…といはば」の形で、「…といったならば」の意味を表す。

㊻ 副詞「など」が付いた「などいふ」の形で物事や事柄が定かでないものとして示し、「どういう」の意味となる。

〈表6〉 ②《形式的用法》

	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	計	㊽	㊾	㊿	計	合計
申す	37	7	11	4	2	61	/				61
出現率	10.5	2.0	3.1	1.1	0.6	17.2					17.2
言ふ	103	60	10	17	8	198	3	1	1	5	203
出現率	22.2	12.9	2.2	3.7	1.7	42.7	0.6	0.2	0.2	1.1	43.8

「申す」における②《形式的用法》は、全用例の17.2%しかない。「言ふ」においては、全用例の43.8%を占めるのと対照的である。以下、意味・用法について、①から順に述べていく。

②㊸は、「名は…と申し上げる」ということを表す用法で、37例見られる。これは、全用例の10.5%であり、②《形式的用法》の中では、最も多い。

㊸4 按察の二品のもとにわたらせたまふ今御所とかや申す姫宮、十三にならせたまふを、舞姫に出だし立てまゐらせて (Ⅱ318.05)

②㊹は、多く「…と申す」の形で、後に続く語の内容を具体的に説明する用法で、7例見られる。数量を表す語を受けて、順序を表す用法も、ここに含める。

㊹5 父大納言不憫にしさぶらひしを、いまだ襦袢の中と申すほどより、御所に召し置かれてさぶらへば (Ⅱ291.03)

㊹6 御修法の心きたなさも、御心の内わびしきに、六日と申しし夜は如月の十八日にてはべりしに (Ⅲ357.13)

②㊺の中には、「…と申すは」の形で、主語にたち、「と」で受ける語句を取り立てて示し、主題を提起する用法も含めている。

㊺7 やがて常の御所へ入れまゐらせらるれば、いかがはせむ、つれなく御前にさぶらふに、そのころ今御所と申すは、遊義門院いまだ姫宮におはしましころの御

す」という用例がある。「申す」は「為す」という意味である。これらの「申す」は、形式動詞的な用法とも言える。

㉑ 春の初めにはいつしか参りつる神の社も、今年はかなはぬことなれば、門の外まで参りて祈誓申しつる心ざしより、むばたまの面影は別に記しはべれば、これには漏らしぬ。(I 250.16)

㉒ すでに大臣の位を授けたまひしを、近衛大将を經べきよしを、通忠右大将書き置く状を申し入れて、この位を辞退申すところに、君すでに隠れましましぬ。(I 219.04)

㉓ あへなく失せ候ひし形見には、いかにもと申し置き候ひしに、領掌申しき。(I 274.15)

㉔ 事ども始まりて、案内を申さる(II 341.09)

最後に、iii「差し上げる」「ふるまう」「御馳走する」という意味について述べる。『とはずがたり』では、5例見られ、すべて、お酒、あるいは、お酒を飲むための盃を差し上げるという意味である。

㉕ 三献までは御空盃、その後、「余りに念なくはべるに」とて、女院御盃を齋宮へ申されて、御所に参る。(I 271.09)

3. 2. 3 ②《形式的用法》

ここでは、実際に話したり書いたりするという具体的な動作性が弱まって形式化した用法について見ていく。

「申す」「言ふ」における②《形式的用法》①から⑦の用例数、そして、「言ふ」の⑧から⑫の用例数を〈表6〉にまとめる。上段の数値は、意味・用法別の用例数であり、出現率は、各用例数を、「申す」の全354例、「言ふ」の全464例を分母として割り、小数第2位を四捨五入して出した数値である。

①から⑦は、以下のように分類する。

① ある語句を助詞「と」で受けて、一般に呼称されている、「名は…と申し上げる」という意味を表す用法

② 「と」で受ける語句の意味を具体的に説明し、その語句と被修飾語とをつなぐ用法

③ 話の内容が伝聞に基づくことを表す用法。

④ 「…申せども」「…と申すとも」「…と申すも」「…と申しながら」の形で、「確かに…であるがしかし…」「…だが、しかし…」などの意味で、接続詞的に用いられ

相に任じていただくように」、⑳は、「姫宮を下さるるに」、お願い申しあげているのだが、その具体的な発言内容は描かれていない。

(19) さても、大納言、たびたび大宮院・新院の御方へ出家の暇を申さるるに、「おほしめす子細あり」とて、御許されなし。(I 218.05)

(20) 「天子には父母なしとは申せども、十善の床を踏みたまひしも、卑しき身の恩にましまさずや」など御述べありて、御看を申させたまへば (I 272.15)

(21) さるほどに、善勝寺の大納言、ゆゑなく剝がれぬること、さながら父の大納言が仕事やと思ひて、深く恨む。当腹隆良の中將に宰相を申すころなれば、この大納言を参らせ上げて、我を超越せさせむと思ひて (II 325.14)

(22) 「齋宮へ入らせたまふべし」など申す宮をやうやう申さるるほどなりしかばにや (III 377.16)

次に、ii「す」「為す」「行ふ」という意味の「申す」について述べる。この用法は24例見られた。(a)発言行為に入れてもよいと思われる例として、㉓～㉕の例がある。「御返事」「御答へ」「御返し」を「申す」という用例である。㉓は二条が後深草院と、㉔は二条が、「有明の月」と共にいる場面なので、言葉で返事をするという意味であり、㉕は、二条が亀山院から来た手紙の返事を書くという意味である。㉓㉔は、(a)の㊸、㉕は、(a)の㊹にも分類できるが、「御返事」「御答へ」「御返し」に、発言行為が含まれているとみなし、「申す」は、「為す」の意味となっているとしたい。

(23) 夜もすがら、つひに一言葉の御返事だに申さで、明けぬる音して (I 201.03)

(24) 例の、けしからずさは、恨めしく、疎ましく思ひまゐらせて、恐ろしきやうにさへおほえて、つゆの御答へも申されで、床中に起き居たる有様は (II 309.02)

(25) 紅の薄様にて、柳の枝に付けらる。さのみ御返しをだに申さぬも、かつは便なきやうにやとて、縹の薄様に書いて、桜の枝に付けて (II 296.02)

また、次のような例もある。「念仏」「祝詞」などは、やはり「御返事」と同じで、発言行為が含まれており、「申す」は「為す」の意味となっている。

(26) 左の方へ傾くやうに見ゆるを、なほよくおどろかして、念仏申させたてまつらむと思ひて膝をはたらかしたるに (I 229.08)

(27) 生身の如来と聞きまゐらすれば、頼もしくおほえて、百万遍の念仏など申して明かし暮すほどに (IV 448.01)

(28) 執行権長吏法印ゑんやうに、紅梅の単衣文・薄衣、祝詞の布施に賜びて、祝詞申させて、東の経所の前に捧げはべりしに (III 404.16)

これら以外には、㉑～㉓のように、「祈誓」「辞退」「領掌」「案内」などの語を「申

憂きことを心一つに忍ぶれば

「と申されさぶらふ心の中の思ひは、我ぞ知りはべる」とて (Ⅲ421.06)

- (16) 隆良、「文」とて持ちて来たり。「所違へにや」と言へども、しひて賜はすれば
開けたるに、

後深草院「かき絶えてあられやすと試みに積もる月日をなとか恨みぬ

なほ忘れぬは、かなふまじきにや。年月のいぶせさも、今宵こそ」などあり。

御返事には、

二条 かくて世にありと聞かる身の憂さを恨みてのみぞ年は経にける

とばかり申したりしに、御鞆果てて、酉の終りばかりに、うち休みて居たるところへ、ふと入らせおはします。(Ⅲ418.14)

3. 2. 2. 2 (b)その他行為

ここでは、①《具体的用法》の(b)その他行為について述べる。i は、神仏や朝廷など支配者に、「お願い申し上げる」、「所望する」という意味、ii は、「す」「為す」「行ふ」という意味、iii は、「ふるまう」「御馳走する」という意味である。

i は、単なる発言行動だけではなく、請願や陳情のような特定の意図を持つことが(a)の④⑤の用法と異なる。この用法は19例見られた。

(17)は、「有明の月」から二条への会話文である。「有明の月」が、二条のことを忘れさせてほしいと仏に祈っている場面である。(18)は、二条が旅先で病んだときの述懐の場面である。

- (17)「憂かりし秋の月影は、ただそのままにとこそ、仏にも申したりつれども、かくてもいと堪へがたくおぼゆるは、なほ身に代ふべきにや。同じ世になき身になしたまへとのみ申すも、神も受けぬ禊なれば、いかがはせむ」とて (Ⅲ356.11)
(Ⅲ356.13)

- (18) 病の床に臥して、あまた日数は積もれども、神にも祈らず、仏にも申さず、何を食ひ、何を用ゐるべき沙汰にも及ばで (IV435.04)

(17)の2つの「申す」の用例は、直前の発言を助詞「と」で受ける(a)の④の用法と通ずるが、ある人物の会話文中に用いられているため、直接の発言を受けているわけではない。また、請願という特定の意図を表し、(18)の「神にも祈らず、仏にも申さず」のように、直前の発言がない場合との境界が難しいため、(b)の i に分類した。

(19)から(22)は、「暇」「御肴」「宰相」「宮」を「申す」という用例である。(19)は、「出家のための辞任を許していただくように」、(20)は、「酒宴の余興をするように」、(21)は、「宰

す」という用例が4例見られる^③。

次に、物事などについて、別の言葉で表現したり、評価を表す形容詞や形容動詞を受けて、判断や評価を示す用法④について検討する。判断や評価の内容は助詞「と」で受ける。

(11) 人に寄りかかりてちとまどろみたるに、昔ながらに変わぬ姿にて、心苦しげにて後ろの方へ立ち寄るやうにすと思ふほどに、皇子誕生と申すべきにや、事故なくなりぬるはめでたけれども（I 252.01）

(12) この大納言は幼くより御心ざしあるさまなれば、これもまた身親しき人なればなどおぼしめしめぐらしけるは、なほざりならずとも申しぬべき。（II 308.16）

(11)は、後深草院の皇子を無事に出産したときの場面である。作者二条の宮廷での身分がはっきりしないため、院の子どもを生んだとはいえ、皇子誕生と言ってもよいのかと、疑問を呈し、その気持ちを表明している。(12)は、「有明の月」が作者二条の叔父である大納言を使って、自分を呼び寄せようとしているのは、それだけ作者自身に対する気持ちがいい加減なものではないのだと評価している場面である。この用法は、「申す」に助動詞を伴う場合が多い。「申すべし」2例、「申しぬべし」1例、「申してむ」1例、「申すも」1例で、合計5例である。

次に、文字に書いた文章によって、考えや物事を表出する用法⑤について見てみる。この用法は16例見られた。(13)は、二条が叔父である大納言に手紙を送って、お立ち寄りくださいと伝える場面である。

(13) 行きても訪ひたけれども、世の間こえむつかしくて、文にて、「かかる所にはべるを、立ち寄りたまへかし」など申したれば（II 326.04）

最後に、④歌を詠む、歌うについて見る。「言ふ」の場合は、今様を歌う例が1例、歌の句の引用が5例見られた。「申す」は(14)のように、歌の句の引用が1例見られた他は、(15)のように連歌を詠む例が1例、(16)のように、手紙に歌を書いて詠む場合が3例の合計5例である。

(14) 御所の内はしめじめとして、いと取り分きたる物の音もなく、新院御対面ありて、かたみに御涙所せき御気色も、「よそさへ露の」と申しぬべき心地ぞせし。（I 215.13）

(15) 春宮の御方、
九十になほも重ぬる老いの波
新院、
立ち居くるしき世のならひかな

- ㊤ 言葉で表すという発言行為そのものを表す。
- ㊦ 物事などを別の言葉で表現し、評価をする。
- ㊧ 文字に書いた文章によって、考えや事柄を表出する。
- ㊨ 歌を詠む。歌う。

(b)その他行為は、下位項目として、

- i 神仏や朝廷など支配者に、「お願い申し上げる」、「所望する」という意味
- ii 「す」「為す」「行ふ」という意味
- iii 「ふるまう」「御馳走する」という意味

の3つに分ける。

〈表5〉 ①《具体的用法》

	(a)㊦ 助詞	(a)㊤ 言葉	(a)㊦ 評価	(a)㊧ 文章	(a)㊨ 歌	(a) 計	(b) i 所望	(b) ii 為す	(b) iii 勸酒	(b) 計	合計
申す	139	75	5	16	5	240	19	24	5	48	288
出現率	39.3	21.2	1.4	4.5	1.4	67.8	5.4	6.8	1.4	13.6	81.4
言ふ	177	40	15	2	6	240					240
出現率	38.1	8.6	3.2	0.4	1.3	51.7					51.7

3.2.2.1 (a)発言行為

①《具体的用法》の288例のうち、最も多く用いられているのは、直前の発言を助詞「と」で受ける用法(a)の㊦で139例見られた。これは、全用例の39.3%を占める。以下がその用例である。

- (8) 御所ざまへも、「御いたはしければ、御使な賜ひそ」と申したれば、時など取りて御訪れ (I 257.02)

次に、㊦のように、具体的な発言は受けてはいないが、言葉で表すという発言行為そのものを表す意味・用法㊤について述べる。㊤は、75例見られ、全用例の21.2%を占める。「言ふ」の場合は、㊤の用法は全用例の8.6%であったのに対して、「申す」は、㊤の占める割合が21.2%で、「言ふ」よりも多いのが特徴である。以下に例を挙げる。

- (9) さてしも、かくてはなかなか悪しかるべきよし、大納言しきりに申して、出でぬ。(I 208.13)

- (10) 徒歩なる女房の中に、ことに初めより物など申すあり。(V 527.14)

(9)のように、「かくてはなかなか悪しかるべき」と、発言の内容を簡潔にまとめ、それを「よし」で受ける用例が75例中、26例と多く見られる。また、(10)のように「物を申

用法』は実際に言ったり書いたりという動作性を持つ「申す」であり、②《形式的用法》は「申す」の動作性が弱まった形式化した用法である。③《連語》は、「申す」だけではなく、他の語と結びついた連語として扱ったほうがよい用法である。

①《具体的用法》については、声を出して語や文を発したり、文字に書いた文章によって考えや事柄を表出したりする発言行為か、あるいは、「為す」「行ふ」など、発言以外の行為かによって、大きく(a)発言行為と、(b)その他行為に分けた。

なお、「申す」は上下親疎といった人間関係、場面などによって選択される待遇表現であるが、本稿では、待遇性を考慮せずに、分類を試みる。

3.2.1 意味・用法の偏り

3.2で分類した意味・用法の用例数を〈表4〉にまとめる。『とはずがたり』において「申す」は、全354例のうち、①《具体的用法》が288例で全体の81.4%、②《形式的用法》が61例で全体の17.2%であり、①《具体的用法》が約8割を占めていることがわかる。

〈表4〉『とはずがたり』における「申す」の用法

			計	百分率
①《具体的用法》	(a)発言行為	240	288	81.4%
	(b)その他行為	48		
②《形式的用法》			61	17.2%
③《連語》			5	1.4%
合計			354	100.0%

これより、それぞれの用法について、詳細に見ていく。

3.2.2 ①《具体的用法》

「申す」「言ふ」における①《具体的用法》の(a)発言行為について、㊶から㊸の用例数、そして、「申す」の(b)その他行為について、iからiiiの用例数を〈表5〉にまとめる。

上段の数値は、意味・用法別の用例数であり、出現率は、各用例数を、「申す」の全354例、「言ふ」の全464例を分母として割り、小数第2位を四捨五入して出した数値である。

(a)発言行為は、実際に発言を受けるかどうかで、㊶と㊸に分けた。㊷は何か言葉を発したというよりも、別の言葉で表現し、評価をするという点、㊸は言葉ではなく、文字による点が異なる。㊹は歌を詠む、歌うという意味である。

㊶ 助詞「と」で発言を受ける。

動作性が弱まって形式化した用法が、全体の4割強と多く用いられていたことが関係している。

「申す」において、次に多い活用形は、未然形の98例で、全体の27.7%を占める。「言ふ」は、未然形が全464例中、63例で全体の13.6%であった。なぜ、出現率にこのような違いが生じるのか、下接する助動詞・助詞に着目してみる。〈表3〉は「申す」と「言ふ」に下接する助動詞・助詞による分類とその用例数である。

〈表3〉 下接する助動詞・助詞

	る				す		ず	じ	む	まし	まほし	ば	で	ク語法	合計
	尊敬	受身	可能	自発	尊敬	使役									
申す	60	4	2	2	16	1	4	1	4	1	0	0	3	0	98
言ふ	28	2	2	0	0	1	10	0	13 ^②	2	1	1	1	2	63

〈表3〉から、「申す」に尊敬の助動詞「る」「す」が下接したものが多くあることがわかる。「る」が下接した「申す」は、68例で、そのうち、60例が尊敬の意味である。「す」が下接した「申す」は、17例であるが、使役1例を除いた16例が尊敬の意味を表す。「申させ給ふ」の形で14例、「申させたまつる」1例、「申させおはします」1例である。「申す」は、尊敬の助動詞「る」「す」が下接することが多いことが、未然形が多い理由の一つと考えられる。

「申す」における命令形についても触れておく。「言ふ」の命令形は、完了の助動詞「り」を伴った「言へれば」の形で、地の文において1例用いられているのみであったが、「申す」は、命令形「申せ」が7例、会話文において用いられている。次にその用例を挙げる。

- (6) 長絹の直垂の上ばかり着て、その上に袈裟かけて、「念仏、仲光も申せ」とて
(I 229.05)
- (7) 「いかがすべき」と言ふほどに、「まづ大事に病むよしを申せ。さて、人の忌ませたまふべき病なりと、陰陽師が言ふよしを披露せよ」などとぞ添ひ居て言はるれば (I 256.12)

以上のように、「申す」と「言ふ」において、それぞれ、活用形による用例数の比率が、異なることから、意味・用法に違いが見られることが予想される。

3.2 意味・用法による分類

『とはずがたり』における「申す」の意味・用法を次のように分類する。①《具体的

(1) 経任、さしも御あはれみ深き人なり、出家ぞせむずらむと、皆人申し思ひたりしに (I 217.09)

(2) さもありぬべきなれば、車のこと、善勝寺へ申しなどして、伏見の小林といふ所へまかりぬ。(II 333.02)

また、「申し沙汰」「申し状」がそれぞれ1例ずつ見られるが、これらは、「申す」の連用形が前項である複合名詞とし、対象外とした。

なお、「申す」を補助動詞とするか本動詞とするかについてであるが、本稿では、和語動詞の連用形に続く「申す」はすべて補助動詞とした。(3)から(5)に見られるような「申す」が、前項の「甘え」「あひしらひ」「あやしみ」などの語と分けて、「申す」の意味を持った本動詞であるかどうかを個々に判断することが難しいからである。

(3) また御目をも見せられまらせさぶらふにつきて、甘え申しさぶらひけるか、それも私には知りさぶらはず。(II 291.09)

(4) この御気色、なほざりならぬことなり。心得てあひしらひ申せ。(III 354.12)

(5) あまたの夜を重ね、日数を重ねてはべれば、あやしみ申す人、都にも田舎にもその数はべりしかども (IV 479.14)

3. 『とはずがたり』における「申す」の意味・用法

3.1 活用形による分類

『とはずがたり』において、「申す」は354例見られる。まず、活用形による分類の結果を〈表1〉に挙げる。入江(2013)の「言ふ」の結果も〈表2〉に挙げる。

〈表1〉「申す」の活用形による分類

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	合計
用例数	98	120	36	67	26	7	354
百分率	27.7%	33.9%	10.2%	18.9%	7.3%	2.0%	100.0%

〈表2〉「言ふ」の活用形による分類

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	合計
用例数	63	77	60	221	42	1	464
百分率	13.6%	16.6%	12.9%	47.6%	9.1%	0.2%	100.0%

動詞は、連用形が最も多く出現するのが一般的である。『とはずがたり』における「申す」も連用形が120例、33.9%で最も多く、全体の三分の一を占める。「言ふ」は連体形が47.6%で最も多かったが、これは、実際に話したり書いたりするという具体的な

『とはずがたり』における「申す」の意味・用法

入 江 さ や か

1. はじめに

本稿は、鎌倉時代成立の『とはずがたり』における「申す」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとの用例数を挙げることを目的とする。以前、調査した、入江（2013）の「言ふ」との比較を通して、『とはずがたり』における「申す」の意味・用法についてその特徴を述べる。

2. 研究方法

2.1 調査資料

調査資料は、久保田淳校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』（以下、『新編』と称する）とする。辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【自立語篇】も適宜、参照する。

2.2 調査の手順

『とはずがたり』に用いられている「申す」の用例をすべて抜き出し、意味・用法の分類、記述を行う。用例を記す際は、『新編』の本文で「申す」が用いられている箇所を抜き出し、（巻、頁数、行）の順で記す。（V502.03）は巻五502頁、3行目ということである。

2.3 調査対象とする「申す」

本稿では、本動詞の「申す」を調査対象とする。「申し合ふ」「申し入る」「申し承る」「申し知らす」のように、「申す」の連用形に他の動詞が続いた複合動詞38例^①は除く。ただし、(1)の「申し思ふ」のみ、複合動詞とせず、「申す」と「思ふ」の二語に分け、「申す」を調査対象とした。(2)の「申しなどす」は、前項「申す」と後項「す」に分けて、前項の「申す」を調査対象とした。